

活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

## 自分の一歩 みんなの一歩

校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年9月13日

No.48 (合同No.18)

校長 野口 邦彦

### 東京2020オリパラに思う③

## これこそがスポーツの原点 失敗しても笑顔で「ありがとう」

色々あったオリンピック、パラリンピックですが、始まってしまうと、連日、日本人の活躍に一喜一憂している自分がいました。しかし、ある種目のある選手を見た時、そんな勝敗に一喜一憂している自分が恥ずかしくなりました。

その選手は、スケートボード フィリピン代表のマーヅリン・ディダル選手です。

今大会から新競技となったスケートボード、男子の堀米雄斗選手や女子の西矢椛選手が金メダルを取り、一気に脚光を浴びました。この「ストリート」という種目は、階段や手すりなどの障害物をいかにかっこよくスケートボードで滑り降りるかという競技です。その



種目に参加したディダル選手、何度も何度も技を失敗、でも落ち込むわけでもなく、何度も何度も立ち上がり、みんなに笑顔で答える。最後の技も失敗、でも笑顔でみんなに「(日本語で)ありがとう」と言っていました。その姿に、清々しさを覚えました。スポーツが競技である以上、そこには勝敗が付きます。でも、勝敗に関わらず、自分の力をひたむきに精一杯発揮しようとする姿に、「スポーツは本来こうあるべき」という原点を見たような気がします。

試合後のディダル選手の言葉「スケートボードは人生と同じ。何度転んでも、また立ち上がり挑戦すればいい。オリンピックと言う大きな舞台上で、自分の限界に挑戦できることがうれしい」と。

努力が結果に結びつき歓喜する選手。思ったように自分の力が発揮できず、結果が出せず涙する選手。この歓喜も涙もスポーツです。でも、ディダル選手のように、「この舞台にいれることがうれしい」とオリンピックという場を思いっきり楽しんでいる姿もスポーツです。

「転んだら、また立ち上がればいい」ディダル選手の姿に、あらためてスポーツのすばらしさ、そして元気と勇気をもらいました。

### 競い合うけども仲間

スケートボードという種目、まさにこれからの五輪に似合った種目だと思いました。競技の中でライバルと競い合っているけれど、今まで培った自分の技を見せ合う、成功した選手とは共に喜び、失敗した選手にはみんなが集まり、健闘をたたえ合う、そこには他の競技のような何としてもメダルを取らなければという悲壮感はありません。本来の「スポーツの在り方」とはこうあるべきと、あらためて教えてくれる競技でした。

スケートボード ストリート  
ディダル選手



失敗した選手に  
かけよる仲間

